

229

2024.4.1

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University

▶ 2024年度 学会活動（予定）

2頁

▶ 2023年度 学会活動報告

3頁



東京女子大学

「わたし」を知ること

東京女子大学 学会委員長
歴史文化専攻 白井 恵一

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。東京女子大学学会を代表して心から歓迎いたします。

さて「東京女子大学学会」とは、いったい何でしょうか。一般に「学会」といえば分野別に組織され、専門家たちが研究成果を蓄積し、お互いに議論を戦わせながら学問の発展を追究していく組織です。そんなところが学生の、それも新入生の自分たちとどんな関係があるのかとみなさんは思われるかもしれません。じつは「東京女子大学学会」はそのような一般的な「学会」とは異なって、東京女子大学の教員と学生を会員として、学生のみなさんが「みずから学ぶ」ことをお手伝いする組織です。みなさんは東京女子大学の新生であると同時に「学会」の新会員でもあるわけです。

このような組織は他大学ではあまり目にすることがないようですが、その特筆すべき点は、「学会」が大学の「教室」とはちょっと違った場所で、みなさんが「みずから学ぶ場所」、学生と教員が「ともに学ぶ場所」であるということです。たしかに大学の先生たちは自分の研究分野で訓練をつみ知識を蓄えた専門家ですし、学生のみなさんは、大学で学びたいと思っている役に立つ知識やスキルをすでにたくさんお持ちでしょうから、安心してその指導にしたがうことで自分自身を成長させることができます。与えられた課題をこなしてゆく中で成長を実感する場面も、これから多々あることと思います。しかし新しい学びの場に足を踏み入れたこの機会に、ちょっとたちどまって「そもそも何か」ということを考えてみるのも悪いことではありません。「みんなが役に立つと思っているスキル」、「みんなが持っているべきだといわれる知識」、こういったものをできるだけたくさん身に付けるということばかりに躍起になっていると、「誰のために」「何のために」ということが忘れられがちです。スキルや知識は「道具」ですが、道具を使うのは他の誰でもないあなた方、「この私」です。

「私とはいったい何なのか」、「私はほんとうはどこまで『私』なのか」というのは、なかなか難しい問題です。今の世の中の常識や通念にすっかり染まって、「それが私」と思いこまされているだけかもしれません。あるいは逆に、自分以外の誰か、現代社会や世界を「そのようなもの」と勝手に思い込んでいる「私」がいるのかもしれません。世界が、人々が多様であること、その中に「かけがえのない私」や「あなた」がいること、そんなことを体感できる場所は、実はなかなか見つけることが難しいものです。大学はそのような貴重な場所のひとつです。「わたし」自身を問い直すこと、自分自身を変化させながら新しい世界へ足を踏み入れていくことに大学で学ぶことの価値が、なにより

その喜びがあります。このような学びは「よく生きること」にとっても「役に立ち」ます。思いもよらなかった新しい世界の入り口が隠れているかもしれません。

日常の中でふと不思議だと思ったこと、今まで考えもしなかったことをちょっと追いかけてみましょう。こういったことには自分ひとりではなかなか気づけませんし、ゼロからひとりで積み上げてゆくのは至難の業です。「みずから学ぶ」と同時に「ともに学ぶこと」の大事さがここにあります。そしてそれは先生たちにとっても同じです。東京女子大学の先生たちはみなさんを指導する先達であるだけでなく「ともに学ぶ仲間」でもあるのです。東京女子大学学会は、そのような皆さんの活動をサポートする場所ですから大いに活用してください。

発足は1950年5月で70年以上も前のことになります。ひるがえって現状を見れば、コロナ禍で社会の在り方も人々の生活も、大学もまた大きく変化しました。国際情勢も緊迫し未来は混沌としています。今までのやり方そのままでははや通用しませんが、だからといってやみくもに変化を追い、いたずらに迅速な解答ばかりを求めるのではなく、ちょっとひとつ大きく深呼吸をして、自分自身を振り返ってみることで、問題の建て方自体を模索することが必要でしょう。

大学の公式サイトに学会のページがあるので、一度見てみてください。講演会や研修会、学術交流会や学術雑誌など、さまざまな活動の報告をみることができます。中でも学会では、学生のみなさんが自主的に行うグループ研究に年2回「学生研究奨励費」を出しています。自分たちがやりたいテーマを決め、学年専攻の違いを越えて仲間が集まって活動を行い、その成果を「成果発表会」というかたちで、みなに知ってもらえることができます。もちろん必要な助言を教員から受けることもできますし、申請して採択された場合8万円までの「研究奨励費」を給付されます。半年ごとに申請の機会がありますから、是非一度チャレンジしてみてください。

自らの関心を深く掘り下げるだけでなく、仲間と共有し、さらに多くの人たちに知ってもらおう。知的好奇心を大きく外に広げてゆく喜びを、この学会という場で見つけていただきたいと願っています。

2024年度 学会活動(予定)

◆始業講演／学生研究奨励賞グループによる発表

学内限定オリエンテーション特設サイトにて配信

「ストレスへの対処法 — 認知行動療法のノウハウをもとに —」

心理学専攻教授 森田慎一郎

(学会 心理学部会)

学生研究奨励賞受賞グループ発表

「オンライン学習支援における『学び合い』の実態」

竹川 奈々 他4名

◆学術交流会

詳細は後日ご案内いたします。

◆公開連続講演会

教育学・博物館学部会にて開催予定です。

◆部会主催講演会・研修等

それぞれの部会の企画のもとに、随時開催されます。その都度、正門脇のガラス掲示板、学会掲示板、ホームページ、専攻オフィス掲示板等でお知らせいたします。

◆学生研究奨励費

学生会員のグループが行う自主的な研究活動を対象に、研究経費を授与します。

A 一般研究奨励費

1 グループ当たりの奨励費は8万円（ケースによっては15万円まで）

B 刊行補助費

自主的に進めた共同研究の成果を刊行しようとするグループに対して、その費用を援助するものの2種類があります。

グループの募集は、前期（5月中）と後期（10月中）の2回。研究グループは、助言者を決め、約9カ月の研究の後、研究成果を報告会で発表します。研究成果報告は学会ニュースに掲載します。

発表会はWebにて今年度は行います。

奨励費についての問い合わせは学会事務局へ。

◆刊行物

・学会ニュース

この号の他に年間3号刊行の予定です。学生ホール、図書館等学内に置きますので、ご自由にお持ちください。6月（卒業論文紹介）、11月（学生研究奨励費研究成果報告）、2月（公開連続講演会記録）に刊行の予定です。

◆学術雑誌

各部会関係の学術雑誌については、それぞれの専攻オフィスにお問い合わせください。おおむね年度末に刊行されています。

2023年度 学会活動報告

講演会等

〈学会主催のもの〉

◆始業講演

「六十年前の葬式の白黒写真」

歴史文化専攻教授 高田 陽介
(学会 史学部会)

◆学生研究奨励賞受賞グループ研究発表

オリエンテーションサイト ビデオ配信

「屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験」

伊藤 花織 他8名

◆公開連続講演会

神秘的な数学の世界

(企画：数学部会)

- (1) 代数解析学の考え方とその応用
— 微分方程式と超関数と確率分布
東京女子大学名誉教授 大阿久俊則
- (2) フーリエ解析とその応用
東京女子大学名誉教授 宮地 晶彦
- (3) 知恵の輪のトポロジー
早稲田大学教授 谷山 公規
- (4) 有限群とその表現
東京医科歯科大学名誉教授 清田 正夫

〈部会主催のもの〉

◆哲学部会 主催 ●●●

(12.22)

疲れた人々

～疲労について哲学的に考える

東京女子大学 名誉教授 佐々木能章

哲学部会では本学名誉教授の佐々木能章先生による講演会「疲れた人々～疲労について哲学的に考える」を2023年12月22日に開催した。講演の主題は「疲労」であり、佐々木先生はまず「疲労」についてのいくつかの定義および科学的研究を紹介され、その多面性を確認された。例えば、小木和孝が示すように、重労働により疲弊した際の「ぐったり疲労」とスポーツなどの後に感

じる一種の爽快感を伴う「さわやか疲労」など疲労にも多様な種類や側面があるというのである。

佐々木先生はそこから疲労についての多面性を全体として捉える「疲労の哲学」の余地が存在すると論じ、デカルト、レヴィナス、ビョンチョル・ハンなどの哲学者の議論を引きつつ、疲労についての哲学的分析を進める。とりわけ、能力社会における疲労が人々を孤立させるのに対し、他者と語り合いまなごし合う疲労が重要であるというハンの議論—佐々木先生によると、これはペーター・ハントケの思想にその起源を持つ—を引きつつ、共感しあわれるものとしての疲労の意義が取り出される。すなわち、佐々木先生によると、疲労を通じて人と人々が共鳴するさまに人間のあり方の根本を見出すことができるというのである。

佐々木先生の講演は抽象的な哲学的議論を含みつつも、アニメ『フランダーズの犬』のラストシーン—「パトラッシュ、疲れたろう。僕も疲れたんだ。なんだかとても眠いんだ、パトラッシュ」というセリフが有名である—やご自身が体験されたお遍路での疲労と共感といった生き生きとしたわかりやすい例示を含み大変興味深いものであった。

(文責 大谷 弘)

◆日本文学部会 主催 ●●●

(12.19)

『万葉集』の歌人と中国文学

東京女子大学 名誉教授 安藤 信廣

師走も押し迫った2023年12月19日火曜日4限に、本学名誉教授の安藤信廣先生をお迎えしての本講演は、2020年よりコロナ禍に見舞われ、開催自体できなかったり、学内者限定の対面になったり、の日々を経て、久しぶりの自由な対面での講演となった。安藤先生の教えを昔々に受けたという卒業生も来校され、現実に一堂に会して共に学ぶことの有り難さが身に沁みだ。それでも、まだ遠慮があるのか、以前に比べれば、学外者の来校は少なめだった。

講演で取り上げられたのは、相撲使に随行して上京中に客死した大伴熊凝のために山上憶良が歌った歌や序文と庾信「傷心賦」、大伴旅人の讃酒歌の「一杯の濁れる酒」と嵇康「与山巨源絶交書」の「濁酒一杯」、さらには讃酒歌の「賢」「酔ひ泣き」と嵇康ら竹林の七賢の泥酔の関連である。憶良や旅人ら万葉歌人たちにとって文字に蓄積された知、心と言え、まずは漢籍であり、それらを学んだからこそ歌を作り文字(漢字)に残すことができた。ゆえに、万葉歌人に中国詩人が影響を与えたとは言うまでもないことなのだが、印象に残ったのは、不条理を生きる心の表現を、万葉歌人が先人の文学に共鳴しつつ見いだすさまである。

若い身での客死という不条理への痛切な慟哭を、犬のように地べたに臥し柴や草を敷いて死ぬ姿や、ゴミ処理のように素焼きの棺を枝葉で縛っただけで埋葬する無念に描く。あるいは不正と悪意が横行する乱世に生まれ合わせた不条理への命がけの抵抗（権勢に阿るのではなく）として、「濁酒（安酒）」に酔い奇行に走る自分を歌う。不条理に突き当たった人間はどうすれば良いのか。どう文学に残すのか。先人達の文学への、安藤先生の深い洞察と共感に導かれて、今を生きる自分たちの文学についてもさまざまな考えさせる、含蓄深いご講演であった。
(文責 今井久代)

◆国際英語部会 主催 ●●●

(11. 2)———

Second Language Vocabulary Acquisition

Ph.D. Michael Christopher Green

On the 2nd of November, Dr. Michael Green conducted a workshop on vocabulary learning titled “Second Language Vocabulary Acquisition.” The event was supported by the Academic Society of Tokyo Woman’s Christian University and organized by the English Department. Dr. Green completed his doctoral studies in Applied Linguistics, more specifically lexical studies, at Cardiff University in the UK. He has over 30 years of experience teaching and teacher training in a variety of learning contexts, including Portugal, Taiwan, Brazil, Bahrain, the United Arab Emirates, and Japan. He currently teaches at Rikkyo University.

The workshop provided an overview of English L2 (English as a second language) vocabulary learning. The speaker and the audience considered the practical implications of vocabulary size and depth, and different aspects of word knowledge. Participants were introduced to useful vocabulary websites and also examined vocabulary learning techniques which are supported by research findings. Here is a comment from a student who took part in the workshop, “The vocabulary workshop last week was interesting! I really enjoyed the class. I learned the importance of learning vocabulary for language learning and also started using Quizlet again.”

(文責 橋本ナターシャ)

(11. 16)———

The Ownership of English

Ph.D. Mahboubeh Rakhshandehroo

On the 16th of November, Dr. Mahboubeh Rakhshandehroo gave a talk about the ownership of the English language. The event was supported by the Academic

Society of Tokyo Woman’s Christian University and organized by the English Department.

Dr. Rakhshandehroo received her PhD in Critical Studies in Transformative Education from Osaka University. Her research interests include English-medium instruction (EMI) support, English native speakerism, multiculturalism, and collaborative online international learning (COIL). She currently teaches at Kwansei Gakuin University in Hyogo Prefecture.

The presenter introduced the concept of Braj Kachru’s (1992) three circles of global Englishes — the Inner (e.g., the United States, the United Kingdom), Outer (e.g., India, the Philippines), and Expanding (e.g., China, Japan) circle. Following that, she discussed several important issues relevant to English language teaching and communication with various users of English in the global context. Furthermore, the presenter shared her personal experiences with learning and teaching English in Japan. The speaker encouraged the audience to consider the idea of English as a lingua franca or English as an international language used among “nonnative” English speakers. The audience was engaged, and several students asked questions and shared their own experiences of using English with a variety of interlocutors.

(文責 橋本ナターシャ)

(12. 18)———

***The Time for Carving:
Modernist Voices in American Poetry***

Prof. Biljana Obradović and Prof. John Gery

On 18 December 2024, Prof. Biljana Obradović and Prof. John Gery gave a talk on American modernist poetry titled *The Time for Carving: Modernist Voices in American Poetry*. The event was supported by the Academic Society of Tokyo Woman’s Christian University and organised by the Department of English. The talk was given in week 12 of the Literature in English (Poetry) course.

Prof. Obradović is a Serbian-American poet and a professor of English at Xavier University of Louisiana. Prof. Gery is an American poet and a research professor at the University of New Orleans. Prof. Gery has played an important role for many years in organising the biennial conferences of the international Ezra Pound Society, which is dedicated to the study of the American modernist poet Ezra Pound.

Prof. Obradović discussed how three poets — Claude McKay in “If We Must Die” (a sonnet), Paul Laurence Dunbar in “We Wear the Mask” (a rondeau), and Countee Cullen in “Incident” — exploit and revise traditional poetica forms to depict racism towards

African Americans in the United States. Prof. Gery examined how three American women poets — Gertrude Stein, H.D., and Laura Riding — each express distinctly female perspectives by creating new poetics in their poems.

The event was attended by around twenty students and staff. Both the students and staff asked many pertinent and thoughtful questions that led to stimulating conversations about the value and legacy of American modernist poetry.

(文責 Andrew Houwen)

◆史学部会 主催 ●●●

(1. 19)

大学で〈歴史総合〉について考える

神戸学院大学 准教授 北村 厚

2024年1月19日に、東京女子大学学会史学部会・読史会講演会が開催された。講演者として神戸学院大学の北村厚氏をお招きし、2022年度から高校教育で新設された必修科目「歴史総合」についてお話ししていただいた。北村氏は2023年10月に『大学の先生と学ぶはじめての歴史総合』（KADOKAWA、2023年）を出版されたばかりで、また『教養のグローバルヒストリー』（ミネルヴァ書房、2018年）などで知られており、ドイツ現代史研究者以外にも歴史教育分野で大いに活躍されている方である。本学の歴史文化専攻では毎年、中高教員を輩出しており、歴史教育に関心のある学生にはとくに意義のあるものとなった。同時に、歴史学に携わる者としては学生・教員関係なく刺激となる話だった。とくに今回は、講演後に学生コメンテーターを準備し、氏の講演・著書についてのコメントも交えて議論は大いに盛り上がった。

具体的には、歴史総合の柱である「近代化」という大きな概念の下に「工業化」「国民国家」「主権国家体制」が置かれ、その下に各歴史的な事象が位置し、そこから「現代の私たち」を考えていく構造が示された。さらに大衆化やナチズムについて、高校では史料読解中心というわけではなく、研究潮流を押さえることから、基礎が作られていくという指摘もあった。学生の質問では、やはり教員自身の能力の限界やテストなどの問題について等が出された。先述のように参加者すべてにとって学ぶところの多い会となった。

(文責 柳原伸洋)

◆国際関係部会 主催 ●●●

(12. 4)

難民の声を届ける、という仕事

UNHCR 駐日事務所渉外担当官 古林安希子

国際関係部会には「戦争・災害と人間」というテーマがある。2023年12月4日にUNHCR駐日事務所渉外担当官の古林安希子氏による「難民の声を届ける、という仕事」と題した講演会を行った。

古林さんは8月に現職に就くまで、アフリカ最大の難民受け入れ国であるウガンダのUNHCR事務所でアソシエイト・ソリューションズ・オフィサー、北部ユンベ県では保護官の経験を積まれてきた。講演を通して、私たちはウガンダ政府の難民受け入れ政策の先進性（オープンドアポリシー、就業や移動の自由、教育や医療の提供等）とUNHCRの活動の関係を学んだ。

UNHCRの「声を届ける」という活動の一環として、難民自らが声をあげる場である「難民参画会議」の紹介があった。ウガンダでは37名の難民が年4回ほど共通の課題を検討するという。このような場を経て国レベルの会議へ参加する難民もいるようだ。一方、まだ条件の整っていないユンベ県では、UNHCRが政府、行政、個人が連携するインクルーシブな社会づくりを目指してきた。スクリーンに映る学校やヘルスセンターの写真には、受け入れ地域の住民との平和的共存を支え、難民コミュニティの自主性尊重や自立促進の象徴である「声」に向き合う古林さんたち職員の姿があった。

実は、古林さんのユンベ県での日々は出産、子育てという人生曲線の中にあっただけでなく、就きたい仕事に携わるまでの努力と柔軟性の大切さ、UNHCR職員としての日々を丁寧に率直に学生に語ってくださる古林さんの姿も印象的であった。参加学生たちには、紹介されたプラットフォームやイベントを心にとめ、各々の人生曲線を豊かに描いてほしい。

今年度も総合教養科目「平和学」担当の河合利修日大教授のご尽力でUNHCR関係者を招聘し、専攻や学年を問わない多くの学生が参加できる講演会を実施できた。深く感謝いたします。

(文責 國原美佐子)

(12. 18)

ファッションから考える、私たちの生活と世界のつながり

茨城大学人文社会科学部法律経済学科 准教授 長田 華子

長田華子先生（茨城大学人文社会科学部法律経済学科准教授）による「ファッションから考える、私たちの生活と世界のつながり」と題する講演が、12月18日（月）1時限、国際社会学科国際関係論必修科目「文化人類学II」を利用して行われた。アジア経済論、南アジア地域研究、ジェンダー論を専門とされている長田先生は、世界第二位の衣類輸出国として知られるバングラデシュに

おける縫製産業の実態を、縫製工場の内部の様子、そこで働く女性たちの姿や思い、彼女たちの家庭の様子などを、さまざまな写真やデータを通して丁寧かつ詳細にご紹介くださった。学生たちにとっても馴染みの深いファストファッション製品が、実際にはどのような過程を経てつくられているのか、また、なぜこれらの製品を低価格で販売することが可能なのかという問題に触れ、グローバル・サプライチェーンにおける労働の問題を具体的に理解する貴重な時間となった。本学の卒業生でもある長田先生は（2005年、文理学部社会学科卒業）、途上国の貧困問題や女性問題に関心を持ったきっかけ、フィールドワークの拠点としてバングラデシュを選んだ理由、バングラデシュに初めて訪れた際の衝撃などを率直に語ってくださり、世界との繋がりを深めようとしている学生に大きな勇気を与えてくださった。

（文責 西村もも子）

◆経済学部会 主催 ●●●

(6.14)

「アジアと日本
～アジアから見た日本と
国際機関での経験～」

前アジア開発銀行（ADB）総裁 中尾 武彦

経済学部会では2023年6月14日、大学院（グローバル共生社会分野）との共催で前アジア開発銀行（ADB）総裁の中尾武彦氏（現みずほリサーチ&テクノロジーズ理事長）を講師として招き、掲題講演会を開催した。

中尾氏は約7年間にわたるADB総裁時代にアジア太平洋地域の46カ国を巡り、各国が独自の歴史、文化、考えを持っていることをあらためて認識し、アジアを一括りで議論することはできないという。各国リーダーは様々な国内問題に直面しており、各国の悩みに意を用いることも大切とも説く。インドのモディ首相、フィリピンのドゥテルテ前大統領、ミャンマーのアウンサンスーチー元国家顧問との面談時のエピソードについても披露いただいた。

ADBはアジアにおけるジェンダー平等促進にも積極的に取り組んでいる。貸し手の立場から、融資先のジェンダー平等へ働き掛けを行っており、また、ADB自らの幹部や専門職員に占める女性比率の向上も図っているとの説明も、多くの参加者にとって新鮮な発見であったものと思われる。

日本には私たちが余り意識していない強みがたくさんあるというのが中尾氏の見立てである。例えば、社会の安定と分断の少なさ、勤勉な国民性、お客様志向の高さと徹底したサービス精神、高品質の農産物・果物である。アジアで、そして世界で日本が誇れるものは多いとの中尾氏のメッセージに学生、一般参加者など約70名の参加者は大いに勇気付けられた。

講演後には活発な質疑応答がなされ、講演会終了後も一部の熱心な学生が中尾氏を囲み追加で質問を行った。大学での勉強の意味、結婚・子育てや女性のキャリアの

あり方など、番外編として率直な意見交換が続いたことも印象的であった。

（文責 長谷川克之）

(11.16)

パレスチナ人道危機の背景
—イスラエル占領・軍事封鎖下で生きるとは

開発コンサルタント 山村 順子

東京女子大学学会経済学部会・キリスト教センター共催・SDGs推進委員会からご後援をいただき、2日にわたって「緊迫するガザ人道危機！ 緊急講演会」と題して講演を行った。1回目の講演は現地情勢や問題の根本原因の解説に重きを置いたものであり、2回目は現地情勢や問題の根本原因の解説に加え、紛争地で国際協力の仕事に就くという、キャリアに関して触れる部分も追加した。質疑応答では、参加者の生徒の方々から、どのニュースを見るべきかといった質問や、国際協力のキャリアを築くにあたっての細かい質問など、幅広い質問が寄せられた。

現在、ガザ地区が空爆下にあり、もっとも深刻な人道危機にあるため、まずはそこで起こっている軍事封鎖下の現実を説明した。厳しい移動制限に加え、安定的に供給がなされていない電気・水・食料事情に加え、高い失業率、十分でない医療制度などについても言及した。この後で、根本的なパレスチナ問題において理解が不可欠である「軍事占領」の本質を知ってもらうため、ガザ地区の現況だけでなく、難民が大勢出た経緯を含むパレスチナの歴史、そしてヨルダン川西岸地区で起こっている拡大する入植地の現況、それに加えてパレスチナ人の自由な移動を妨げる検問所や分離壁のある日常についても解説し、いかに今の状態に持ち込まれたかを解説した。プレゼンの中には、現地で撮影した写真を多く使用し、なるべく現地の一人一人の顔が想像できるように心がけた。また、戦争前の街の写真、そして戦争後に現地（ガザ地区、西岸地区両方）の人々から日々届いた声を紹介した。

(12.13)

「歴史的転換点に立つ我々と金融の新しい姿」

みずほFG特別顧問・元社長、経団連副会長 佐藤 康博

経済学部会では2023年12月13日、みずほフィナンシャルグループ特別顧問の佐藤康博氏を講師として招き、掲題講演会を開催した（キャリア・センターとの共催）。佐藤氏はみずほフィナンシャルグループの社長、会長等を歴任し、現在は経済団体連合会の副会長も務める日本の経済界のリーダーでもある。

佐藤氏は、我々を取り巻く巨大な変化として3つの潮流を挙げた。第1には、世界で進む分断である。地政学リスクが高まり、世界のパワーバランスが変化する中で、「グローバルサウス」と呼ばれる新興国が台頭している。欧米では国内での分断も深刻な社会問題となって

いる。第2には、資本主義の持続可能性への疑問である。地球温暖化問題、人口の偏在、所得格差の拡大、国家資本主義の台頭などから、資本主義のあり方が問われている。第3には、科学技術イノベーションの圧倒的な進展である。具体的には、生成 AI（人工知能）、量子技術、フュージョン（核融合）エネルギー、バイオ技術などがある。そうした最先端技術には人々の社会生活を一変させる「光」の側面だけでなく、基本的価値観や人生観にも大きな影響を与える「影」の側面もあると佐藤氏は警鐘を鳴らす。

金融のあり方も自ずと変化しており、金融には先行き不透明な時代における羅針盤としての役割が求められている。スタートアップ企業への積極的な支援や社会的な課題解決への貢献も金融にとっての重要な課題となっている。

講演では、ご自身の経験も踏まえて、「何故、経済学を学ぶのか」、「リーダーの基本的な心構え」についてもご教示いただいた。経済学を学び、将来社会で活躍する東女生にとって、示唆に富む大変有意義な講演会であった。

(文責 長谷川克之)

◆自然科学・情報処理部会 主催 ●●●

(12.11)

ダンゴムシは迷路で何をしているのか？

信州大学繊維学部 准教授 森山 徹

心の科学、比較心理学、動物行動学、認知科学に関わる学術領域を専門とされている森山徹氏（信州大学繊維学部准教授）をお招きし、特にダンゴムシの行動実験に関するご研究を中心にご講演をいただいた。

講演の序盤では、ダンゴムシの基本的な生態についての説明がなされた。特に、ダンゴムシは続けて障害物に遭遇したり障害物から解放されたりするときに左右交互に進行方向を変える傾向があるという交代性転向反応を示すことが知られている。しかし、ダンゴムシが無制限に続けて T 字路を通過できるように工夫した実験装置である多重 T 字迷路を経験させると、ダンゴムシは壁を登って迷路から抜け出すことがあることを森山氏は発見した。これに加えて、T 字路間の距離を長くするとダンゴムシは交互ではなく同じ方向に曲がる傾向が出る、ダンゴムシを水に満たされた堀で囲まれたアリーナに放置すると窒息の危険のある堀を泳いでアリーナから脱出することがある、といった様々な実験の結果が実験の様子の動画とともに詳しく紹介された。以上のどの実験も、ダンゴムシを未知の状況下におくと通常は想定されていない行動が発現しうる、ということを示唆している。このようなダンゴムシの想定外の行動はどのようにして生み出されるのであろうか。この疑問に対する説明として森山氏らが近年提唱している行動抑制ネットワーク仮説について、情報科学との関連を踏まえながらの解説が講演の終盤になされた。

(文責 春名太一)

(12.21)

「太鼓の形を聞く」と 微分作用素の固有値問題

東京女子大学現代教養学部 教授 劉 雪峰

本講演では、数学における基礎的課題の一つである「微分作用素の固有値問題」を扱いました。特に、太鼓の振動という身近な例を用いて高度な数学的概念を分かりやすく解説しました。太鼓の音色は形やサイズによって異なりますが、その逆、つまり音から形を推測することは可能なかという点に焦点を当て、この「形を耳で聞く」という興味深い話題を紐解きました。さらに、太鼓の形状と振動モードの関係についての研究を踏まえ、三角形におけるラプラス微分作用素の固有値分布に関する未解決の問題にも言及しました。

微分作用素の固有値に関する研究は長い歴史を持ち、特にその上下界の評価には多くの研究者が関与しています。講演者は、過去 10 年間にわたって特に困難とされる固有値の下界評価法について研究を進め、有限要素法を用いた新しい評価法を提案しました。この方法は、「ミレニアム懸賞問題」の一つである流体力学のナビエ-ストークス方程式の解の正則性問題にも応用されており、講演でその成果が紹介されました。

講演の中では実験ビデオと CG アニメーションを利用して、数学の複雑な部分を興味深く分かりやすい形で説明しました。学生を含む参加者にとって、数学の理解を深め、学びの面白さを実感できる貴重な機会を提供できたのではないかと考えています。

◆外国語部会 主催 ●●●

(5.1)

国際機関で働くということ ～自分より大きな目的のために～

FOGGS 副会長・米州開発銀行紛争解決ファシリテーター 安川 順子

本講演会は、長く国連で勤務され、現在はコスタリカ在住の安川順子氏をお迎えし、国際関係専攻の尾尻希和教授との Zoom 対談を収録し、必要に応じて字幕をつけるなどして学生にわかりやすい動画にした上で、学内外に配信するという形で開催された。

安川氏は、大学に入学した当初はとくにはっきりした目的意識はなく、漠然とっと広い世界が見たいという思いだったということで、20 歳前後で将来の進路を明確に決めなくてもいいとお話されました。また、アメリカで幼少時代を過ごしたので英語は自然に身につけたが、スペイン語は国連の語学教室で身につけたという。ラテンアメリカで仕事をしたいと思っていたので、スペイン語を勉強しようと思ったのがきっかけだったとお話されました。

そもそも国連で働くことになったのは、日本の NGO で働いていた時に、国連で働いたらどうかと誘いを受

け、外務省のJPO派遣制度を利用して国連で働き始めたという。これは現在も実施されているプログラムであることが説明された。

安川氏がラテンアメリカで国連の仕事に就いてから感じたのは、家族を大切にすること、そして幸福度が高い地域であるということ。安川さん自身も、日本を離れて長く外国で勤務をするにあたり、家族と一緒に生活しながら勤務することで救われた、というお話があり、ライフ・ワーク・バランスについても学生に参考になるお話となった。

(文責 尾尻希和)

◆健康・運動科学部会 主催 ●●●

(5.31)

「健康のための細胞とのコミュニケーション・コラボレーションと女性のライフステージ」

帝京大学先端総合研究機構 特任教授 跡見 順子
東京大学 名誉教授、東京農工大学 客員教授

「発育と発達」の授業では、人間の身体の発育・発達や運動能力の発達の経過を学びながら、各ライフステージでの健康問題についての理解を深め、個人・社会として生涯健康を維持するための対処法を考えることを目的としています。第8回目の授業では、跡見順子先生をお迎えし、120歳まで生きるための「身心一体科学」の考え方と実践方法（“細胞たちとコミュ・コラボ”して120歳まで生きるためのエクササイズ（臥位身心調律運動））をお話いただきました。「身心一体科学」とは、本来一体設計で育った自分の身心でありながら、動作原理が分からず分離しがちな自分の身体と心を、力学的ストレス応答や活動依存という細胞適応的生存原理と、臥位身心調律運動の実践により自己の変化を言語化し、働きかけに応答できる自己を体感し発見する科学です。「身心一体科学」では、わたしたち人間のからだの中で生命の最小単位である細胞が生きている・動いていることを理解し、その細胞の仕組みを知って健康維持に必要な身心のメカニズムを学びます。細胞たちがもつ能力を最大限に引き出し、正しく身体のシステムに働きかけていくためには、私たちの体が細胞から成ることを理解し、細胞に意識を向け、程よいストレスを細胞に与えることが必要であることを学びました。受講した学生からは、「細胞に上手に働きかければ120歳までも生きられるということに驚きました。私たちの身体には想像以上の可能性があるのではと思いました」「特に細胞が実際に動いている動画が印象的でした。これまでは写真でしか姿を見たことがなかったので今回の授業で細胞が生き物であること、自分の身体を構成しているもので大切にしていける必要があることを実感することが出来ました」等の感想が寄せられ、78歳とは思えないほど若々しい跡見順子先生から元気の秘訣を教えていただき、ご講演から多くの学びを得たように思います。

(文責 藤田恵理)

(12.1)

「女性アスリートが備えるべきセルフコンディショニングの力」

日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンススポーツセンター
連携・協働推進部産学協働推進課 専門職

国立スポーツ科学センター スポーツ・科学研究部 研究員

中村 有紀

本講演では、「女性アスリートが備えるべきセルフコンディショニングの力」について、中村有紀先生にご講演いただいた。

中村先生が所属する日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）では、世界一を目指すアスリートやチームをスポーツ医・科学、情報面からの支援や研究で支えている。アスリートのハイパフォーマンスの発揮には多岐にわたる要因が関わり、それらすべての要因を目標とするコンディショニングにできる限り近づくように整えることを「コンディショニング」という。HPSCにはアスリートのコンディショニングを支える各専門家が集結し、高度な知識や技術を提供している。

女性にはライフステージに伴うさまざまな健康課題があり、それらが女性アスリートのコンディショニングやパフォーマンスの発揮に影響を及ぼす可能性がある。近年、スポーツの世界で活躍する女性アスリートが増えていく中で、スポーツ医・科学的な研究が進み、課題となっていることやそれらに対する方策も整理されてきている。講演では月経などの婦人科的課題、女性アスリートの三主徴（利用可能エネルギー不足、無月経、骨粗しょう症）や、スポーツにおける相対的エネルギー不足（REDs: Relative Energy Deficiency in Sport）などについてのご紹介、それに対する対応策の解説をいただいた。また、大切なのは自分自身が理解し、目的地にたどり着くための解決策を特定・実行できること、すなわち、セルフコンディショニングの力であり、講演を通して皆さん自身が備えるべきセルフコンディショニングの力について考えるきっかけとさせていただければ、と思いを話して下さった。

大変充実した講演で、体育会部員の学生が前列で熱心に聴講する姿も見られた。聴講された皆様の今後の健康や、体育会・体育系サークルの活動の充実につながれば幸いです。

(文責 平工志穂)

(12.15)

「疾病と栄養・食事」

島村記念病院 管理栄養士 田中 純子・小西 舞

本講演は、「疾病と栄養・食事」と題し、本学校医・島村記念病院副院長の増古賢太郎先生にご指導いただき、島村記念病院の管理栄養士の田中純子先生、小西舞先生をお迎えして開催した。女性に関連の深い疾患である鉄欠乏性貧血・骨粗鬆症・生活習慣病について、その症状と対策を、医学、栄養、食事を中心とした生活習慣

の観点からご講演いただいた。

貧血については、低血圧との違いについてご説明いただき、貧血と低血圧はめまい・倦怠感など症状がよく似ているが医学的にみると全く異なること、貧血とは赤血球中へのヘモグロビンの量が少ない状態を指し、それに対して低血圧は脳への血流が悪くなるのが原因で症状が出ることなどを解説いただいた。

骨粗鬆症については、女性の閉経後のホルモン（エストロゲン）減少の影響による骨量の低下と、骨粗鬆症予防のための骨活の重要性について解説頂いた。また20代は骨を作る大事な時期だとして、カルシウムやビタミンDをしっかり摂取できる献立をご紹介いただいた。

生活習慣病（糖尿病・脂質異常症・高血圧）については、東アジア系の人種は膵臓からのインスリン分泌量が多いため、糖尿病を発症する確率が高いこと、実際日本人で糖尿病を発症する平均BMIは24～25となっていること、長い人生を健康で過ごすには20代からの生活習慣が大事であることなどを解説いただいた。

女性の健康や女性に関連の深い疾患に関連して、不足しがちな栄養素を安価な食材でおいしく摂取できる手軽なレシピのご紹介や、調理を楽にする便利グッズを簡単に作る方法のご紹介などがたくさんあり、自炊を頑張っている、これからチャレンジする学生さんにとって、是非参考にさせていただきたい内容が盛りだくさんの講演会であった。

（文責 平工志穂）

学生研究奨励費

【後期募集分】

地域日本語活動における支え合い

～参加者の「自発的発話」に注目して～

北中 伶奈 他7名

日英児童文学研究 ―食をめぐる物語―

小林 千紘 他4名

対等的で双方向な学びを支える意識形成

―オンライン学習支援活動を通して―

東樹 美和 他5名

【前期募集分】

「近世期における『源氏百人一首』の受容」および

「版本における文字の調査」

窪川 葵 他11名

若年女性を対象としたよもぎの健康効果の研究

田畑 華蓮 他5名

地域日本語活動における参加者の居場所感

―安心して参加できる環境づくり―

矢部 紬 他5名

オンライン学習支援における「学び合い」の実態

竹川 奈々 他4名

「屋外空間のさらなる活用に向けた社会実験」

研究報告書の製作

伊藤 花織 他4名

学生研究奨励費成果発表会（7.21 7.24/1.16 1.17 1.22）

刊行物

◆東京女子大学学会ニュース

第225号（4.1）2022年度学会活動報告

第226号（7.1）卒業論文紹介

第227号（11.15）学生研究奨励費成果報告

第228号（3.1）公開連続講演会報告

【学会から補助を受けている刊行物】

◆日本文学 第120号（東京女子大学学会日本文学部会）

南北と棺桶 補遺 光延 真哉

『新撰万葉集』研究

―上巻の「雁」を中心に―

清水 もも

式子内親王「山深み」考

鈴木 美笛

中世における異類婚姻譚の研究

―木幡狐を中心に―

奥苑明日佳

『雨月物語』「浅茅が宿」論

城戸はなね

江戸活躍期の二代目沢村田之助について

安井 昌子

芥川作品における殺人表象

道廣 響

向田邦子論

―「思い出トランプ」における家族と個人―

佐藤 楽

コルシア書店の終焉についての一考察

薬師寺美穂

「時をかける少女」研究

―少女がかけた半世紀―

飯淵 宏美

明治時代の小説の会話文における男女差

山岡 由季

第四十三回 松村緑賞

第四回 比較文化研究所賞

第四回 女性学研究所賞

二〇二二年九月・二〇二三年三月卒業論文題目

二〇二三年三月修士論文題目

東京女子大学日本文学研究会規約

- ◆ Essays and Studies of the Department of English
Tokyo Woman's Christian University Graduation
Essays 2022-2023
(東京女子大学国際英語部会)
- A Study of William Shakespeare:
The Reception of *The Tempest* in Music
in the Romantic Period Eri Seki
- A Study of Arthur Miller:
Linda's Role and Influence in *Death of a Salesman*
..... Rio Nojima
- A Study of Differences in Linguistic Forms
between English and Endangered Languages
..... Aki Takubo
- Representations of History in Popular Culture
..... Maria Cuevas Martin
- Attitudes towards English Language Teaching:
A Study of Elementary School Teachers
..... Mako Abe
- A Study of the Subtitles
of *In This Corner of the World* Kanon Kihara
- A Study of the Translation of Narrative Style:
Focusing on Three Japanese Versions of
"Christmas Meeting" Bian Suzuki
- Graduation Essay Titles 2022-2023

◆史論 第77集 (東京女子大学読史会)

◆東京女子大学国際関係研究 第12号
(東京女子大学国際関係専攻)

◆東京女子大学社会学年報 第12号
(東京女子大学社会学専攻)

■論文■

- 出会い系アプリは「純粹な関係性」を棄損するか？
—「愛のアルゴリズム化」批判の再考 堀内進之介
- 予測アルゴリズムの受容と年齢の関係
—ジェロントロジーの社会学に向けた予備的研究
..... 山本 耕平
赤堀 三郎
- 台湾の介護施設に対する外部評価の現状と課題
..... 西下 彰俊
- デジタル化はモダニティの解釈にどう影響を与えるか？
—ソシオサイバネティクスによるアプローチの試み
..... 赤堀 三郎

■研究ノート■

- Angestellte 概念の形成 酒巻 秀明
- 身体・性別・社会
—J. Raymond「インテグリティの倫理」に関するノート
..... 金野美奈子

□社会学専攻 2023年度卒業論文題目一覧

◆東京女子大学経済研究 第12号 卒業論文要約号
(東京女子大学経済学部専攻)

- 外国人旅行者の日本訪問要因に関する実証分析
..... 五十嵐早紀
- 子どもの貧困対策としての子ども食堂の意義と課題
..... 関口 好美
- アイドル界におけるマーケティング戦略
..... 田中 彩夏
- リノベーションの普及と課題 山形 美月
- キャッシュレス化による消費者行動への影響
..... 吉原 綾香

2023年度卒業論文題目一覧

◆2023年度 卒業論文集 東京女子大学現代教養学部
国際社会学科コミュニティ構想専攻
伊奈ゼミ・榎山ゼミ

- 2023年度 卒業論文集 東京女子大学現代教養学部
国際社会学科コミュニティ構想専攻
藤稿ゼミ・矢ヶ崎ゼミ
(東京女子大学コミュニティ構想専攻)

◆東京女子大学心理学専攻卒業論文要約集 2023年度
(東京女子大学心理学専攻)

◆Culture and Communication 第36号
(東京女子大学コミュニケーション専攻)

◆教職・学芸員課程研究 第4号
2024年度 東京女子大学教職・学芸員課程
(教育学・博物館学部会)

編集・発行 東京女子大学学会
